
風の都 雨の都

章廊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風の都 雨の都

【Nコード】

N1099X

【作者名】

章廊

【あらすじ】

「その子を守護霊にできるということは、あなたが違う世界から来たというのは本当みたいね。昔もいたのよ。あなたみたいな人。至って普通の人間のくせに、精霊に触れることができる奴がね。あなたと同じように、この世界の人間じゃなかった」

清貴の前に現れた、かつて国神とまで崇められながらも、その栄光の全てを失い、邪神として恐れられる風の精霊。彼女は清貴が元の世界へ戻る方法を知る唯一の存在なのだった。

「キヨ君、騎士さんになるの？」

この地はハイランドと呼ばれる。高地に位置した土地柄か、いつも風が強く吹く。時に荒々しく、時に優しく。この地は長く風が守護する聖なる土地だと信じられていたらしい。だがそれも昔の話だ。今では誰も風の力を信じていない。

一陣の風が吹き抜けた。全身を撫でるような通り風は、疲れた体に心地よい。ハイランドに来て以来、清貴の唯一のなぐさめは、この風を無心に浴びて空を仰ぐことだった。

まさか自分がこんなことになるなんて。もう何度同じことを考えたか分からない。どのように考えを整理しようとしても答えは出なかった。貴清は堂々巡りに陥った思考を振り払い、ゆっくりと瞼を開いた。

眼前には「廃都」が広がっている。広大な草原の中に廃墟群がひしめき、その間を風が吹き抜ける。朽ちた建造物の随所で奏でられる風の音色はいつも空虚で悲しいものだった。随分前にこの都は捨てられ、新都が別の場所へ作られた。ここはハイランドの敗戦の象徴とされ人々は足を踏み入れようとしない。

ため息を一つつき、廃都を鳥瞰する。どこまでも寂しい景色だった。何度目を凝らしても目に映るものには何の変化も見いだせない。

これは現実だ。

目を擦ろうが、頬を抓ろうが、気付いたらいつもの自分の部屋にいて、なんだ夢だったのか、なんてオチには辿り着けそうにない。や

はりこれは現実だ。

清貴は東京の大学に通う普通の、それはそれは普通の学生だった。学校で授業を聞き流し、友達と共に昼食を頼張り、夕方にはバイトへ向かう。時々、就職のことなどを考えてみたりして憂鬱な気持ちになる。そんな大学生だった。

自分がその時なにをしていたのかは不思議と何も覚えていないが、とにかく、気付くと森の中で倒れていた。最初はそれこそ夢だと思っただが、どれだけ経っても覚めないのなら、これは夢じゃなく現実だろう。見たこともない異国風の町の中を徘徊する内に、ここはハイランドと呼ばれる国なのだと分かった。

次に分かったことは、ハイランドは地球のどこにも存在しない国であるということだ。ここには自分の帰るべき家も学校もなく、つまり生きていくのに必要なものを何も持ち合わせていなかった。

そこから大変だった。一日や二日なら野宿もできようが、ずっとは無理だ。まず食べ物が無い。お金もない。結局やるべきことはハイランドでも東京でも変わりはない。

働かなきゃ生きていけない、ということだ。

風変わりな清貴を雇ってくれるような者はなかなかおらず町を徘徊すること四日。ついに力尽きて裏路地に倒れた。ここで終わりか、これでいいかげん目を覚ませよな、そう一人独ち、意識は薄れていた。だけれど、その願いは叶うことはなかった。

「おーい、キヨタカ君」

呼び声にふと我に返る。振り向くとリーフさんがこちらに手を振っ

ていた。

「そろそろ帰ろう。じき暗くなる」

「あ、はい。すいません」

清貴は駆け足で恩人であるリーフさんを追った。あの時、倒れていた清貴を家に連れてかえり体力が戻るまで面倒を見てくれたのはこのリーフさんとその家族だった。あまつさえ、彼の果樹園の仕事を手伝わせてもらい、見返りに家の離れにおいてくれている。彼がいなければ清貴はこの世界で野垂れ死んでいたことだろう。

「お疲れさん。今日も疲れただろう」

細身だががっちりとした腕で清貴の肩を叩く。

「いえ、全然大丈夫です」

元気よくそう答える。実際は、慣れない農作業に全身が悲鳴を上げていたが恩義に報いるため弱音は吐けない。

「じきに収穫期になる。そしたら忙しくなるが、それを乗り越えれば収穫祭がある。ハイランドで一番でかい祭りだ。それを楽しみに頑張ろう」

どこの世界にもいい人はいるものだと思う。例え本当の意味で別の世界であったとしても。

二人はともに馬車に乗り込み家へと向かった。新都郊外に位置するリーフ家まではのかな風景が続く。慣れてくれば、ここは悪いところではなかった。東京のようにごちゃごちゃとした土地にはない、肩に力をいれない長閑さに次第と馴染みだしていることに気づく。

リーフ家についたところにはすっかり日は落ちてしまっていた。窓辺からこぼれるオレンジの明かりに一日を無事終えたことに安堵を覚える。農機具をしまうのを手伝い、共に玄関の戸を開ける。

「おかえりパパ！」

元気のいい声が弾ける。小さな影がこちらへ駆けてきてリーフさん

に抱きつく。

「ただいまマリナ。いい子にしていたか？」

リーフさんの顔がほころぶ。父親の顔だ。

「うん！　してたよ。キヨ君もおかえり」

「おう、ただいま」

そう言つてリーフさんに抱きかかえられているマリナの頭をこしごとと撫でる。

「ごはん出来てるわよ」

リーフ夫人も優しく出迎えてくれる。この三人が助けてくれなければ今頃自分は本当に野垂れ死んでいたことだろう。そう思うと感謝の念が込みあがってくる。

テーブルにつき暖かい食事を頂いていると、話題は迫る戦争の話になった。清貴には信じられないがここでは戦争は日常茶飯事というべきか、いつ勃発してもおかしく情勢だった。廃都がそれをまざまざと語っている。

「なんでも、前線の堡壘がヴァルジア軍に突破されたらしいんだ。

ああ、タカキヨ君、ヴァルジアというのは隣国の岩窟国家ヴァルジアのことだ。この島は西のハイランド、東のヴァルジアによって二分されているんだよ」

もう何度が受けた説明だが、この土地のことをよく知らない清貴のためにリーフさんは丁寧の説明を入れてくれる。

「信じられないことに堡壘を襲ったのは、重装備をした女兵で編成された部隊らしいよ」

「女兵、ですか？」

「女性の兵士のことだよ。もともとはハイランドの伝統だったんだが、戦争が長引いたせいだろう。ヴァルジアも女性を戦場に出すことにしたんじゃないかな。だけど、ハイランドの女性は比較的長身で体格が優れた人が多いけど、ヴァルジアの女性は小柄な人が多い

と聞く。それで優秀な重装女兵団を組織できるとは思えないんだけどね」

「いずれにせよ、ぶっそんな話よ」

リーフ夫人が顔をしかめる。

「ここにも戦争やつてくるのかな」

マリナが不安そうな表情を浮かべる。リーフ家のような農民にとって戦争は危惧すべき事態だ。戦火が迫ってきてても財産である農地は持つて逃げる事ができない。結局すべてを失うことになる。平和な東京で暮らしていた清貴には感じたことのない危機感だ。自分ができることはないだろうかと思う。でも、こんな居候でしかない自分にはなんの力もないのだと気づく。早く元の世界に帰りたいと思う。

しかし。

東京に暮らしていた自分の生活を振り返る。一体その先にどんな未来が待っているのだろうか。東京は平和だ。だが、その中で幸せな人生を歩むことが出来るだろうか。自分がなりたいものは？ どんな風に生きていく？ 結局なにも考えがないことに変わりはない。リーフ一家に気づかれぬようにため息をついた。

「そのせいか知らないがハイランドは混成騎士団というものを編成することにしたらしいよ」

「こんせーきしだん？」

マリナが首を傾げる。

「混成騎士団、だよ。身分や出身、経歴を問わずに実力のあるものを募集して騎士団を作るという話なんだってさ。ほら普通は小さなころから英才教育を受けさせて騎士を育てるだろう。そして、いざ戦が大きくなると今度は兵隊を募集する。それでも足りなければ徴兵といって国民に兵隊になることを義務にするんだ。でも、それじ

や本当の戦力と呼べるのは最初からいる騎士団くらいだろう。徴兵された者なんて所詮は付け焼刃にすぎないからね。だから常時抱えておく騎士を増やす必要があるんだ。前線の堡壘が破られたくらいならまだ大丈夫だろうけど、備えあればってね」

リーフさんはそう言っただけで、口には含んだ。

「まあ、騎士なんていつでも格下扱いは免れないだろうけど」

「リーフさん、その騎士団って誰でも入れるんですか？」

「うん。入隊試験に合格さえすれば誰でもなれるという話だけど」

清貴の中で何かがぴんときた。

「混成騎士団……」

騎士団に入ればとりあえず食うものには困らないだろう。いつまでもこの一家のお世話になり続けるわけにはいかない。元の世界に帰る方法が検討もつかない以上、なにかで生計を立てていなければならぬ。何より、この世界では変わった風貌である自分は怪しまれてまともな職になどありつけられそうにない。実力さえあれば誰でも、という文言は清貴にとって魅力的だった。

「清貴君、まさか試験を受けてみようとは思ってるのかい？」

「僕みたいなものでも受け入れてくれるのなら試してみる価値はあるんじゃないかと……」

リーフさんはフォークをテーブルに置き、腕組みをした。

「どうやら僕は余計な話をしてしまったみたいだな」

「え？」

「君はうちの厄介になっていることを案じてそう思ったんじゃないかい？」

清貴は言葉を返せない。

「別に僕たちは君を面倒になんて思っていないよ。君がいたければいつまでもいてくれて構わない。君が言うところの元の世界とやらに帰れる方法が見つかるまでね。何か職をもって自活しようとする

ることはいいことだよ。でも、何も戦争に関わることになる兵隊に
なんてなる必要は万に一つもない。それにここは君の世界ではない
のだろう？ それであれば尚更、この国の戦争に関わる必要なんて
ないと僕は思う」

夫人もマリナも清貴を見ていた。真っ直の暖かい眼差しだった。涙
が溢れそうになるのを懸命に堪えて微笑んだ。

「僕はやっぱり自分の力で生きていく自活力が必要だと思うんです。
元の世界に帰る方法はもしかしたら一生見つからないかも知れない。
先の見えないことに期待して何もしないわけにはいかないと思っ
んです」

「キヨタカ君……」

「それに僕は子供のころに剣道を習っていたんです。あつ、剣道っ
てのは、剣術みたいなものです。だからもしかしたら騎士が向いて
いるかもしれません」

清貴はそう言つて剣道の素振りをして見せる。懸命に強がっている
ことはリーフ一家にはお見通しだろう。それでも、いつまでもここ
で世話してもらう訳にはいかない。強く自分にそう言い聞かせた。

その夜、ベッドの中で悶々と物思いにふけた。啖呵を切ったもの
の、本当に自分に騎士なんて勤まるのだろうか。もし勤まらないと
判断されたら即時、落とされるだろう。落ちたあとはどうしようか。
またリーフ家の世話になるのだろうか。それだけは避けたかった。
あの後、リーフさんは、そんな必要はないの一点張りだった。本当
の親父のようにさえ思えた。ここは居心地がいい。居心地が良過ぎ
る。だからこそ、この環境に甘んじてはいけけない。強くそう自
分に言い聞かせる。

俺は変わらなければいけないんだ。
すると、部屋のドアがすつと開く気配がした。隙間から小さな影が

こちらを伺っている。

「マリナか？」

小さな影はこくりと頷くと小走りにベッドに近寄ってきた。グレーの瞳が月明かりに輝いていた。

「キヨ君、騎士さんになるの？」

清貴は半身を起してマリナを見た。まだ十歳の彼女は小さく、触れれば折れてしまいそうだった。

「そうだよ。お兄ちゃんは立派な騎士になって手柄を立てるんだ」
笑顔で答えて頭を撫でる。

「ここから出て行っちゃうの？」

「時々遊びに来るよ。たくさんお土産を持ってね。マリナは何が欲しい？ お兄ちゃんが何でも買ってきてきてあげるぞ」

「マリナ欲しくない」

小さな声は消え入りそうだった。

「兵隊に行った人はね、帰ってこないことが多いんだって。おばあちゃんが言ってた。みんな必ず帰ってくるって言って出ていくの。」

それでほとんどの人が帰ってこないんだって」

「そうか。どの世界でも同じなんだな」

「キヨ君の世界も戦争あるの？」

「うん。あるよ。大きな戦いが何度もあった。僕が知らない昔の話だけど」

マリナは泣きそうな顔で俯いた。

「こっちにおいで」

清貴は狭いベッドの端に体を寄せてマリナを招き入れた。

「お兄ちゃんの世界の話聞かせてあげよ」

「本当？」

「うん、この世界と同じように長い長い歴史があるんだ。僕が知らないことだっただくさんある。そうだな、どんな話からがいいかな」

清貴の脇に潜り込んできたマリナにいろいろな話を聞かせてあげた。

戦いの話はしたくなかった。様々な国の文化や食べ物話を聞かせてあげた。話せば話すほど元の世界での生活がどれだけ豊かなものだったかに気づかされた。いつかマリナにも見せてあげたいな、そう思いながらいつの間にかマリナと二人、兄妹のように寄り添って眠りに落ちていた。

次の日から清貴は混成騎士団の情報を集めた。リーフさんの情報に間違いはなく、確かに身分や出身は問われないということが分かった。決心を新たに、試験当日を待った。

新都へと出立する時、やはりリーフさんは乗り気ではないらしくため息をついていた。結果がどうであれ必ず戻ってくるようにと何度も言ってくれた。清貴は乗合馬車の中で一人静かに泣いた。こんな自分のためにここまで思ってくれる人がいるということが嬉しくてならなかった。しかし泣いてばかりもいけない。自分は騎士になるのだ。自分を鼓舞して奥歯を強く噛みしめた。

馬車に揺られながら見慣れた森の一本道を通り過ぎる時、若い女の子の囁き声が聞こえた気がした。マリナよりももう少し歳が過ぎた女の子の声。清貴は周囲を見渡すが太陽の木漏れ日の中を木の葉が舞うだけだった。もう一度耳を澄ましてみる。やはり女の子の声が薄らと聞こえてくるような気がする。この森には森の霊が住んでいるのだとマリナが話してくれたのを思い出す。もしかしたら自分を見送ってくれているのかもしれないなどと考える。思えば自分がこの世界で目を覚ましたときにいたのもこの森だった。

「いつてきます」

清貴はそう囁き返すと木の葉が呼応するように舞い上がった。その舞を見上げながら馬車は都へと歩を進めた。

「貴様の言う勝つ戦い方とやらを見せてみる！」

新都は華やかだった。様々な人が行き交い、様々なお店がひしめき合っている。そんな中、屈強な体軀をした者たちが吸い寄せられるように都の中心地へと向かっている。皆、混成騎士団の入隊試験を受けるのだらう。そんな中、清貴は見るにも貧弱だったがここで引き返す訳にはいかない。流れに沿って試験場である中央広場を目指した。

広場の周囲は立派な鎧に身を包んだ騎士たちが包囲していた。誉れも高きハイランド騎士団だ。彼らの身に着ける鎧を目にしたものは頭を垂れて道を開ける。見物人たちも広場から少し離れたところから礼儀正しく見守っている。

流れのままに広場へと足を踏み入れた清貴は目を見張った。ざっと千人くらいはいるだらうか。各々自信に満ちた顔をしている。ハイランド人は背が高く、清貴が彼らの中にと頭まですっぽりと隠れてしまいそうだった。もみくちゃにされながらも中央で一列に仁王立ちしている身分の高そうな騎士の一団へと向かう。

集合時間の鐘の音が時計台から響いた。千人の志願者たちが雄たけびを上げる。これだけでも既に一つの軍団を組織できるんじゃないかと清貴は思った。すると列の真ん中にいた団長らしき騎士が兜を取った。瞬間、周囲から黄色い声が湧きあがった。清貴は目を丸くしてその姿を見た。脱がれた兜からは長い金色の髪が広がった。よくよく見れば鎧の線が細い。きりりとした端正な顔立ちはまるで彫刻のように美しかった。見た目は二十歳そこそこにしか見えない。

「まじかよ……」

清貴は思わず感嘆をこぼす。隣の男が見ず知らずの清貴になれなれ

しい感じで声をかけてきた。

「騎士団長ヤーナ様のご登場だな」

「ヤーナ、様？」

「なんだ坊主知らないのか？ 騎士の名門の出の上に容姿端麗。槍の名手のヤーナ様だ。あんだだけ美人なのに騎士団長なんだからな。家柄だけでなれるもんじゃないぜ。なんせお袋さんは先のグルム戦役で包囲網を突破してヴァルジア軍を散り散りにしたラリシュ様だからな。ラリシュ様も相当の美人だったらしい。親が親なら子も子ってこったな」

そんな猛々しい美少女がいるなんてこの世界に来てちょっと良かったかも、と清貴が思っていたところに騎士団長ヤーナの声が轟いた。「これより混成騎士団の入団試験を開始する。何の遠慮もいらぬ。お前たちの全力を見せてみよ！」

再び千人の雄たけびが盛り上がった。

試験の内容はいたって簡単だ。騎士団員と木刀で一騎打ちをする。そこで筋があると認められれば合格となる。

「おお、武者震いがするな」

清貴は緊張で手足が震えていた。試合は一度きり。そこで駄目ならまたリーフ一家の世話になることになる。それだけは避けたかった。騎士団員と選ばれた志願者の一団が一行に並び、ヤーナの掛け声とともに一斉に両列が激突する。志願者たちは奮戦するもやはり職業軍人には敵わないらしく、次々となぎ倒されていく。結局、第一次の志願者の中で騎士団員を倒した者は一人もいなかった。だが、そのうちの何人かにヤーナから直々に声かけられる。その者たちは別の場所に案内されていく。どうやら勝てなくとも善戦した者には資格が与えられるようだ。

清貴はわざと後ろの方へ並び、試合の模様をつぶさに観察した。何

か勝てる要素を一つでも見出したかった。自分の番が来そうになると後ろの方へ下がり前の者の戦いを見つめる。型が定まっていな志願者たちは隙だらけで騎士団員にいいように弄ばれていた。さすがにレベルが違いすぎる。さらに後ろの列へ移動しようと思わずさうしようとした時、背中が何かにぶつかった。

「いてっ、あ、すみません」

振り返って謝ろうとした清貴の視界に金の長髪が映った。

「なんだ貴様、さつきから自分の番が来たら逃げてばかりいるな。どういう見だ」

清貴がぶつかったのは、あるうことが騎士団長ヤーナだった。彼女は清貴の行動に気づいていたらしく、わざとそこに立っていたのだった。

「貴様変わった顔立ちをしているな。ハイランドの人間じゃないのか。まあ、いい。貴様、誇り高き騎士の入団試験を受けに来ておいで逃げるなど、この試験を侮辱しているのか？」

きつく気高い口調でヤーナは言った。美人は怒っても美人だな、なんていう考えを振り払い清貴は弁明した。

「いや、違っす。合格者がどんな風に戦っているか勉強してから挑もうと思っ……」

ヤーナの顔がぎりつと歪む。

「ほう。いかにして勝つかを考え抜くのは良い心がけだ。だが、他の参加者たちはそんなことはしていないぞ。皆、己が全力をぶつけて戦っているのだ。合格した者は、中でも勝とうという気概が強かったからこそ通過させたのだ。誰も貴様らに騎士団員相手に勝つことなど期待していない。基礎的な体力と、そしてなによりも自分よりも強い者に全力でぶつかっていく勇氣こそ我々が求めているものだ。自分が勝つために団体の中で一人違う行動を取る者など論外だ」

いや、それは考え次第だろうと言いたい気持ちを抑えて清貴は言

い返す。

「いえ、僕は何が何でも騎士団に入りたいんです。その気持ちの強さの表れであって……」

「黙れ！ この卑怯者が！」

ヤーナの怒声が耳をつんざく。周囲のものたちは二人を遠巻きに見守っている。打ち合いをしていた者たちも思わず手を止めて事の成り行きを見守っていた。

「帰れ。貴様のような根性なしには騎士団員は勤まらない。家でくだらん仕事にでも精を出していればいい」

その言葉を聞いた清貴は、心の中でなにかが千切れるような感覚を覚えた。

「もういつぺん言ってみろや！」

騎士団員たちの顔が凍りつく。

「つまらん仕事だと？ その仕事があんたら騎士を養っているんだろ？ その立派な鎧も剣も全部そういう仕事をしているやつらから巻き上げた税で成り立っているんだろ！ 気位ばかり高いお騎士様くらいになるとそんなことも見えない盲になっちまうのか。そりゃ立派なこった！」

自分でも何を言っているのだろうと思った。それでもヤーナの言葉は許せなかった。自分を助けてくれたリーフ一家も決して軽くはない税に生活の自由を奪われている。それでも国のためだと文句の一つも言いはしない。そんなリーフ一家の仕事をつまらない呼ばわりされ、清貴は本当の親を侮辱されたような気がした。

「盲……だと！」

ヤーナが齒ぎしりしたのがはつきりと聞こえた。

「そうだろうが！ 気概で敵が倒せるのかよ。本当に勝つ奴つてのはな、いつでもいかに有利に戦うか考え抜いているもんなんだよ。気持ちで勝てるって思っている奴つてのは平気で無茶苦茶な戦いを

挑んで仲間を無駄死にさせるんだ。母親は英雄だったのか知らねえけど、あんたがそんな考えもっているようじゃここにいる騎士団員をいつ殺しちまうか分かんねえな！」

真のヒーローというものはそういう合理的な考えを持っているものだ。清貴は信じていた。剣豪もエースパイロットも本当に強かった人というのは、気概や誇りで勝てるなんて信じちゃいなかった。勝つ者というのはその場において有利な立場に立っている者だ。いつでも勝ち続ける者はそのことを熟知し、いかに自分をそういう立場に立たせるかを考え抜いたはずだ。

しかしこの時清貴は、自分の言動が自身を不利な立場に追いやっていることに気づいてはいなかった。ヤーナの相好はいよいよ激しさを増し、唸る獅子のごとき殺気を放っていた。周囲の騎士団員たちもその様子に手を出せずにいた。

「い、いいだろう。おい！ 木刀を持ってこい」

ヤーナがそう言い放つと傍にいた騎士が木刀を二本携えて駆け寄ってきた。それをもぎ取ると一本を清貴に向かって投げつけてきた。

「貴様の言う勝つ戦い方とやらを見せてみる！」

「上等どころ！」

ハイランド騎士団長のヤーナ。対に立つのは風変わりな顔立ちをした清貴。一風変わった取り合わせの試合を誰もが好奇の目で見つめる。

先手を取ったのはヤーナだった。すさまじく鋭い一撃が繰り出される。清貴は剣道を習ったことはあったがこんなに素早い刀裁きを見たことはなかった。かろうじてそれを受け止めるが、次の一手が流れるように飛び出す。明らかに力任せの攻めだった。女の子とは思えない腕力に清貴はたじろいだ。そして不思議と突くべき隙がない。誰の目にも見てわかる力量差がそこにはあった。防ぎきれなかった

一撃が太ももに撃ち込まれる。

「かはっ！」

堪えきれず片膝をつけてしまう。本来ならそこで終わりのはずだった。だが、顔を上げるとヤーナは次の攻撃のために木刀を振りかざしていた。

まずい、そう思ったが遅いか、左腕に激痛が走る。立て続けに背中。全身から感覚が消え去り、肺から空気が全て失われてしまったような息苦しさを感ずる。

ヤーナは肩を上下させて息を整えた。

「ふん、思い知ったか。勝てる力もないくせに偉そうなことをひょうひょうとぬかしおつて。二度と入団試験に顔を出すな」

立ち去ろうとする彼女の後ろでうめき声と共に地面を踏みしめる音がした。振り返ると苦痛に顔を染めた清貴が木刀を構えて立っていた。打たれていないもう片方の足で激痛が走る体を支え立つ姿は不格好ではあったが並々ならぬ闘争心が漲っていた。

「訂正しやがれ。俺たちの生きる糧をくだらないもの呼ばわりしたことを」

「まだほざくか！」

ヤーナが太股で清貴へ詰め寄る。完全に頭に血が上った彼女は、明らかに集中力が落ちている。今ならやれるかもしれない。そしてなによりも、一度もこちらから仕掛けることもなく負けるなどどうしても我慢がならなかった。

ヤーナが大振りに振りかざした瞬間、清貴は全力でその懐へ突っ込んでいく。

鈍い打撲音が響いた。

騎士団員たちは一瞬感じた焦りを拭い、ほっと安堵の息を漏らした。

清貴は肩を強く打たれて地面に突っ伏していた。

「大丈夫ですか、ヤーナ様」

側近らしい騎士がヤーナに肩を添える。彼女はそれを振り払い、設置されていたテントの中へ入っていった。

その後ろ姿を見送った後、周囲にいた者たちが清貴に手を貸す。

「ひどくやられたな坊主。でも命とられなかったただけ感謝しとけよ」
両側から支えられて立ち上がるが、全身から軋むような感覚が走る。広場の隅の方へ運ばれて腰をつく。敗北感に満たされて動く気にもなれない。

やっちまったな。もう混成騎士団に入る道も完全に断たれちまった。心の中でつぶやくが後悔の念は全くなかった。言うべきことを言っ
たし、やるべきことをやった。それでこの結果なら致し方ない。肉体と反して気持ちは軽かった。

なるほど、と清貴は思う。

気概で全力でぶつかって無様に負けを晒しても、こんな気持ちになれるのであれば、それもいいのかもしれない。ヤーナの言うことも一理あると思う。

だけど。

「負けちゃ、意味がねえんだよなあ」

今後のことを少し思案し、深いため息をついた。

「これからどうしよう……」

一人の騎士がヤーナを追ってテントに入った。ヤーナと同じ指揮官を示す兜を被っている。騎士団副団長のゲリットだった。騎士団一の大男であるが、騎士らしく、むさ苦しさを感じさせない高貴さがあつた。

誰かが入ってきたことに気づいたヤーナは取り繕うように背筋を伸

ばす。ゲーリットの姿を捉えると苦しげに短く息を吐いて背を丸めた。

「お前か。驚かすな馬鹿者」

ゲーリットは軽く一礼して、近くの椅子に腰を下ろした。

「やはり胴に一撃食らったんですね」

ヤーナは側近を見上げて口角を歪ませる。

「気づいていたか」

「大丈夫です。一部の者を除いて誰も気づいていません。ヤーナ様の圧勝を信じております」

「当たり前だ。私は騎士団長だぞ。あんな下級に負けるわけがない、だろう」

「無理をなさらないでください」

「こんな無様な姿をさらす訳にはいかないだろう」

懸命に耐えるヤーナの姿を見ながら側近はため息をついた。

「確かにあの者の言うとおりかもしれませんね」

「なにがだ？」

「我々騎士に気位は必要ないのかもしれませんが」

「気でも触れたか？　ゲーリット」

「気位は、真実を包み隠すものです。ヤーナ様自身もうお分かりでしょう。ご自身が彼の言葉に心が揺らいだのを。気位がそれを隠そうとしている」

ヤーナは俯き黙った。

「失礼いたしました。余計なことを言ったようです」

「お前には何でもお見通しなんだな」

観念したと言わんばかりに苦笑する。

「あいつが立ち上がった時に見せた目、ぞくりとしたよ」

「そうですか……」

側近は腕組みをして目を閉じた。

「惚れてしまいましたか」

ヤーナは途端、顔を赤く染め憤慨した。

「ち、違う！　そういう意味じゃない馬鹿！」

身近にあったものを次々とゲーリットに投げつけ始める。

彼は器用にそれを避けながら一人つぶやいた。

「ちよつとからかっただけです。いい加減その方面に免疫をつけていたかないと」

それにしても弄りがいのある人だな、と彼は思っていた。

「あんたの守護霊になっちゃったじゃない」

その日の夜、清貴は他の不合格者たちに連れられて酒場に来ていた。皆、騎士団員にやられて体のどこかしらを重たげに椅子に座していた。

「いや、にいちちゃんがあのヤーナに牙をむいたときは絶対こいつ処刑されるなと思ったぜ」

酒臭い息を吐きながら清貴の肩を叩く。激痛が走るが、酒もまわり、いくらか痛みもマシに感じられた。久々の酒の席であると同時に、昼間の疲労も手伝って飲むペースは随分と進んでいた。

「言ってやりやいいんすよ。あんな高飛車女頼まれたってねえ」

そこまで言って鋭く吊り上げられた青色の瞳としなやかな体つきを思い出す。

テーブルについていた男たち全員が合唱するように声を合わせる。

「抱いてみてえよなああ！」

結局のところ、そういう不潔な話をしていたのだった。

「ありや、ハイランドーの美貌だよ」

「ある意味では、にいちちゃんが羨ましかったもんな」

「あんな美人だったら、ぶった切られて本望だろ。よかったな、にいちちゃん！」

頭をぐりぐりと撫でられるのを無視しつつ、清貴は新しく運ばれてきた酒をあおる。

「しっかし、にいちやんどこの出身だよ？ 本当に変わった顔立ちしているよな」

「黒髪、黒目の奴なんて見たことねえよ」

確かにそうだろう。この国では誰もが有色の髪や瞳を持つ。ヴァルジアには黒髪の者もいるらしいが、瞳にはやはり色がついているの

だという。目立つのも仕方がない。もしかしたらこの風貌のせいで
ヤーナの目についてしまったのかもしれない。

「東京からきたんすよ」

リーフ一家にしか打ち明けていないことだったが、酔っていたせい
もあり素直に答えてしまう。

「トウキョウ？ そんなところあったか？」

誰もが首を傾げる。

「この世界じゃないっすよ。別の世界から飛んできたんすよ。異世
界ワープっすよ！」

声高らかに言つとその場の全員が失笑する。

「なに言つてんだにいちやん。打ち所が悪かったか？」

「嘘じゃないっすよ。すっげーでかい建物が空まで伸びてるんすよ。
馬車なんて相手にならないくらい早く走る自動車や電車が走ってい
るんすよ」

「ああ、こりやもう駄目だ。これ以上飲むな」

そう言つて清貴の酒を取ろうとするのを振り払い、さらに勢いよく
あおつた。

「あんだだけやられりや妄言も吐きたくなるだろうよ」

馬鹿にするような笑い声ももう耳に遠く、意識は薄らいでいく。

「僕は、本当に異世界から来たんだ。本当だぞ」

一人呟くと、そのままテーブルに突っ伏し深い眠りに落ちて行つた。

どれくらい時間が経つただろう。清貴は未だ居酒屋のテーブルに突
つ伏していた。もう騒々しい声も聞こえない。

早く帰らないと。

そう思うが体が重く、動く気になれない。

突然、頭に心地良い感覚がした。誰かが清貴の頭を優しく撫でてい

るようだった。耳元でくすぐる様な落ち着いた声が囁く。

「おにいさん、トウキョウっていうところから来たの？」

綺麗な声だなと思った。全身がふんわりと包まれるような感じがした。

「そくだよ。東京から来たんだ」

酒でかすれた声でそう答える。

「そう、それはこの世界にはない都なのでしょう？」

清貴はゆっくりと頭を横にずらして彼女の方を見た。

長い髪に細い体躯。一瞬ヤーナかと思ったが、彼女はこんな優しい声音では喋らない。よく見れば髪は信じられないほど艶やかな青色で人のものとは思えない光沢を放っていた。清貴の隣の席に座り、頭を撫でてくれていた。

「信じてくれるの？」

「さあ、どうかしら」

彼女はいたずらっぽく笑った。

「あなたには人とは異なる変わった力があつたりするのかしら」

「変わった力？」

「そう。例えば森羅万象の力を操れるような力が」

清貴は頬を歪ませて微笑み返した。

「そんな力あるわけじゃないじゃん。今日だって騎士団の入団試験に落ちちゃったし」

「お転婆ヤーナを相手によく戦ったと思うけれど？」

「見てたの？」

「さあ、どうかしら」

凜々しいヤーナもいいけど、こんなお姉さんもいいなあ、などと思しながら再び睡魔が襲ってくる。

目を開けていられそうにない。もう少しこの子を見ていたいのかなと悔やむ気持ちも眠気にしなだれていく。

「もう少し見守っているわ。あなたが殺すに値するかどうかを」意識の向こうで彼女が何かを囁いた気がしたが、うまく聞き取れなかった。

清貴を含めて幾人かの酔いつぶれた者たちは、居酒屋の店主の手にうよつて店から放りだされた。その場で再び寝始める者もいたが、清貴はふらふらと立ち上がり遅すぎる家路についた。

夢の中で話した女の子は誰だったのだろうと思う。頭を撫でる優しい手つきだけが無性にリアルで現実だったような気もする。

通りかかった遠方行きの荷馬車を捕まえ、森の入り口まで運んでもらうことにした。荷馬車に乗ると同時に三度目の眠気が到来し、瞼を閉じた。

森の入り口で下してもらった頃にはもう朝になっていた。朝日が目に痛く、森の木陰道に逃げるように入っていた。森の中は静寂に包まれていた。木がさざめく音しか耳には届かない。片足を引きずるようにして遅い足を進めた。昼までには森を抜けてリーフ家に辿り着けるだろう。帰った後はどうしようかという悩みは尽きなかった。あの騎士団長がいる新都へはもう行きたくないし、やはりリーフさんを手伝うことくらいしかないのだという現実に突き当たる。もう何度目になるか分からないため息を突き、木の根元へ腰を下ろす。見上げれば、木々の間から青い空が見える。脱力感を沸かせるほどに澄み切った青空だった。

木々のざわめきの中から、またあの女の子の囁き声が聞こえてきた。よく耳を凝らしてみる。やはり木の葉が擦れ合う音だけではない。何かが森の中で囁いていた。

風が吹き抜けて新緑の葉が幾枚も森の中を舞う。声の元はそこから聞こえているように思えた。

清貴は立ち上がり、無心で木の葉の舞の中へ手を伸ばして空を握った。

すると空気を掴んだはずの手は、なにか細く柔らかいものを掴んでいた。

瞬間、目の前に女の子の細い体躯が現れた。彼女は木の葉の舞の中、宙に浮び、驚愕の表情を浮かべていた。清貴が掴んだ細く柔らかいものは、彼女の二の腕だった。

清貴はおのき、手を離す。

少女はそのまま態勢を崩して地面へ落下した。

べちゃっ。

顔面から突っ伏した彼女は、鼻をさすりながら身を起こす。

「ええっっ！」

清貴が驚嘆の声をあげると、彼女はむすつとした顔を向けた。黄緑色の短い髪をし、年齢は十四・五歳といった位の、背の低い女の子だった。

「いきなり手を掴んでおいて、離さないでよ！」

怒っていた。

「いったゝ。鼻が折れたかと思ったゝ」

そう言いながら両手の平で鼻筋を矯正し始める。一通り鼻を撫でまわすと、突然思い出したかのように叫び声をあげた。

「っていうか、なんで私に触れるのよ？」

目を見開いて清貴を見据える。

「人間が森の精霊である私に触れることなんて出来ないはずよ」

おかしいわ、なにかがおかしいわ、と一人でぶつぶつと頭を抱えて

いる。

「えっと、その、大丈夫？」

「大丈夫なわけないでしょ！」

「ごめん」

「ごめんで済んだら騎士は要らないのよ」

どこでも似たような言葉があるらしい。

「あなた何者なの？」

「俺は、清貴。信じなくてもいいがこの世界の人間じゃない。あの本当に森の精霊さん？」

「私が嘘ついているわけないでしょ！」

「うわ、怒られた」

昨日より怒られっぱなしだ。もう慣れてしまいそうだった。

「あなた本当にこの世界の者じゃないの？」

「信じてくれる？」

森の霊は腕を組んで考え込む。

「私に触られる時点で普通の人間じゃないわ。最上級の神官ならともかく、私たちが触れることを許さない限り、並みの人間じゃ触れるのは無理。おにいさんどう見ても身分低そうだしなあ。ありえないのよね」

自覚があるのかどうか分からないが、ひどい言いようだった。

「ねえ、私にもう一度触れてみて。それで確かめることにする」

清貴に真っ直ぐ向き直った。真剣なまなざしで見つめている。清貴は深呼吸をして手を伸ばす。

が、昨日ヤーナに快心の一撃を食らった足がぐらりと傾いた。

伸ばした手の平から、ふにふにとした柔らかい感触がした。

清貴の手は、思いつきり彼女の胸を鷲掴みしていた。

「しっじらんない！ どこ触ってんのよ！」

胸に触れると同時に逆鱗にも触れたらしい。

「す、すまない。バランスが崩れたんだ」

「うそ！ 今すごいやらしい顔してた！」

「ち、違うんだ！ その、多分、昨日のヤーナといい、青髪のお姉さんといい、もしかすると自分の中で何かが限界だったんじゃないかと思う！」

木々が一瞬でざわめきを増したかと思うと、空を覆う程の木の葉が空を舞って清貴に降り注いだ。

地面に叩きつけられるともう起き上がる気にもなれなかった。

「バカバカ！ 今あんたがしたことの意味分かってんの？」

「はい、胸を触りました」

「このバカ！」

「結構いい感じでした。って、やめてやめて！ 首絞めるのやめて！」

いきなり息が出来なくなっただかと思うと森の霊の体が光を放ちだし、首を絞める力が解けていく。

「このバカああ！」

そう叫ぶと同時に、光が清貴の体内へと滑り込む。全身の感覚が消え、何かが体を走り抜けていく。

気づくと、光も、森の精霊の姿も消えてなくなっていた。

そして不思議なことに昨日痛めた部位から痛みが綺麗に消え去っていた。

「なんだったんだ、あいつ消えちまったのか？」

「いるわよ。ここに」

振り向くと鼻先に彼女の顔があった。

「うつわ！ 何してんだ？」

彼女はというと、清貴の肩に縋り付くようにしてふわふわと浮いていた。

「あんたに娶られちゃったんでしょうが」

「娶られたあ？」

「あんたが私の胸に触ったせいよ。それが精霊を守護にする時の契約の儀式なのよ。普通の人間には私たちに触れることもできないから、こんなことは普通ありえないんだけど。まさか触れてみると言われて胸を選ぶなんて常識の無い人間がいるなんて思いもしなかったもんだから……」

頬を膨らませて目を背ける。

心なしか顔が赤い。

「あんたの守護霊になっちゃったじゃない」

「ちっ、あと少してパフパフ出来たのにつ！」

清貴はリーフ家に辿り着き、ことの成り行きを説明した。

騎士団試験に不合格になったこと。帰りに森の精霊を拾ってしまったこと。

もちろん胸を触ったことがきっかけであることは伏せておいたのだけれども。

期待通りに三人は驚いてたが、リーフさんは興味深げに話を聞いてくれた。

「君が別の世界から来たということ疑っていたわけじゃないけど、これで証明されたんじゃないかな。彼女が言う通りに、普通私たちは精霊に触れることは出来ない。もちろん君は神官でもない訳だしこの世界の者じゃないからこそ、そういったことが可能なのかもしれないね」

部屋の隅ではマリナが森の精霊に興味一杯で、あれやこれやと質問をぶつけている。歳が近いせいか意気投合しているようにも見える。

「なにはともあれ、このことはあまり口にしない方がいいかも知れないね。すごい能力であるがゆえに面倒なことに巻き込まれてしまうことも考えられるし」

清貴は申し訳なさそうに頭を下げる。

「すみません。結局面倒をかけることになってしまって。変な奴も連れて帰ってしまうし」

変な奴という言葉に森の精霊が反応していたが、それは無視した。

「いや、全く構わないよ。君はもううちの人間さ。いつまでもここにいればいい」

リーフさんの好意に甘え、今しばらく厄介になることになってしま

った。

次の日からいつものように農作業の手伝いを始め、毎日農園へ向かい汗を流す日々が続いた。

森の精霊には名前を付けてやった。

ファーストインパクトそのままに「木の葉」。

本人もとりあえず気に入ってくれているらしい。次第に清貴にも懐きだし（？）気心が知れた仲になっていった。

木の葉はいつも清貴の肩のあたりに引っ付いて農園にも出かけた。清貴が精をだす姿を楽しそうに見守っている。木の葉からすれば、植物を育てる農家は愛おしい存在なのかもしれない。それでも森を守る霊なのだ。時々、木々などに母親のような口調で話しかけたりする。それは見ていてとても心が和むものだった。

入団試験に落ち、木の葉と出会ってから一か月ほど経ったある日のことだった。一日の仕事を終え、木の葉とつまらないことで仲良く言い合いをしながら帰り支度をしていると、少し離れたところにある木立に背を預けてこちらを見つめる女の子が目映った。風に揺れる青色の髪を見てすぐにあの子だと気づいた。

清貴は農機具を放って駆け出した。

「え？　ちょ、ちよつと」

いきなり走り出した清貴にびっくりしている木の葉にも構わず傍へと駆け寄った。

「お久しぶりね、おにいさん」

光がこぼれるような微笑みだった。

「よかった。やっぱりおねえさんは夢じゃなかったんだ」

安堵している清貴の姿を見て、くすくすと笑う。

やがて彼女の目は、清貴の肩に引っ付いている木の葉へと向けられる。

「そう。やっぱりそうだったの」

妖艶に目を細める。

「ああ、こいつ？ 木の葉だよ。訳あって一緒にいるんだ」

「こんにちは。森の精霊さん」

彼女は何かを含めたような微笑みを木の葉に向ける。

「あれ？ こいつが森の精霊だって知ってるの？」

「ええ、もちろん。見れば分かるわ」

すると木の葉は隠れるように身を縮める。

「き、きよたか」

「木の葉、なに怯えてんだ。大丈夫だよ。この人はお前と会った前
の日に、酒場で僕を介抱してくれた人なんだよ」

「きよたかは、この子誰だか知らないの？」

「えっ、誰って……」

そういえば、誰なんだろうと思う。名前を聞いていなかった。

「風の精霊、よ」

青い髪の女の子はそう言い、微笑んでいた。

「きよたか」。この子と関わっちゃだめだよ」

木の葉はひどく怯えていた。清貴の背中にぴつたりと引っ付いて体を震わせていた。

「その子を守護霊にできるということは、あなたが違う世界から来たというのは本当みたいね。昔もいたのよ。あなたみたいな人。至って普通の人間のくせに、精霊に触れることができる奴がね。おにいさんと同じように、この世界の人間じゃなかった」

「ほ、本当か？ 過去に僕と同じような人がいたのか。もっと詳しく教えてくれないか？」

「そう、ついに現れたのね。私の読みもはずれてはいなかったか」
清貴の問いに耳を傾けることもなく、独り言を言いながらじつとこちらを見つめている。次第に微笑みは消えて、鋭さを増していく。

「殺すに値するわ」

彼女が片手を振り上げると、どこからともなく風が鋭く吹き乱れ始める。

「きよたか。逃げよ。本当に殺すつもりだよ！」

「な、なんで俺が殺されなきゃいけないんだよ！」

「訳は後で説明するから。早く！」

木の葉に急かされ、清貴は踵を返す。全力で走り出した。つもりだった。

足元をすくわれたと思うと体が宙に浮かぶ。風は竜巻へと変化し、清貴と木の葉を渦の中へ飲み込んだ。上下左右も分らないまま激風に晒される。木の葉は一生懸命に清貴に縋り付いていた。竜巻の中央では風の霊が青髪をなびかせながら楽しそうに二人を見上げていた。悔しいが何も抗えない。二人は次第に竜巻の上部へと巻き上げられ、ついに空高く弾きだされた。ざつと二十メートルくらいは飛ばされただろうか。森の端まで見渡せる。

「まずい、落ちるぞ」

上昇が止まると同時に、地面がものすごい速度で迫ってくる。死を明確に感じたその瞬間、木の葉が清貴の背から離れ両手を広げて叫んだ。

「みんな、力を貸して！」

風で巻き上げられていた葉が一斉に呼応し、木の葉に集りベッドくらいの厚みとなる。清貴と木の葉はその中へ頭からダイブする格好となった。地面に着く直前で二人の落下は止まった。代わりに集まった葉が地面へ散らばる。

「助かった。ありがとね、みんな」

清貴は、木の葉の持つ能力をそのとき初めて目にした。間違いなく彼女は、森の木々たちを統べる守護者だった。

「大丈夫？」

木の葉が差し伸べた手を取ろうとすると、後方から風の精霊が再び手を振りかざすのが見えた。

「木の葉っ、危ない」

急いで彼女の手を掴んで、抱き寄せる。二人の上をかまいたちのような疾風が通過する。

目が回っているせいか、逃げようにも体が動かない。

そうこうしている内に風の精霊は二人のすぐ足元に立ちはだかった。木の葉は再び両手を広げて葉を集める。一団となった葉が弾丸のよう

に風の精霊へと突進していく。
だが、そんな渾身の一撃も風には太刀打ちできないらしい。風の精霊が手首から先を軽く振っただけで、散り散りになって消えてしまった。

「木の葉ちゃん、あなたが私に抗えんでも思っている？ 無駄よ。あなたは私には逆らえない」

微笑みを湛えたまま、新たな風を巻き起こして木の葉を地面に叩き付け、倒れ込んだところにさらに次の一撃を加えようと迫る。

清貴は駆け出し、風の精霊の両肩を掴んだ。

「やめてくれ。こいつは関係ない。僕が目的なんだろう。もう抵抗しないから。木の葉には手を出さないでくれ」

風の精霊は嬉しそうに、そして残酷に微笑んだ。

「そう、素晴らしい心がけね。いいでしょう。その子は見逃すことにするわ」

青色の髪が吹き上がる。周囲に再び風が卷出し、笛の様な音を上げる。

これが終わって目が覚めたら元の世界に戻っていた、なんてことになっていればな。清貴は諦め半分にそう思う。その考えが見透かさ

れたのか彼女は相変わらずの笑顔で言った。

「おにいさんは、元の世界へは戻れないわね。戻る方法の一つしかないもの。まあ、あなたのような人には、到底不可能なことよ。だから無駄な期待を抱かずに眠りなさい」

竜巻は先ほどよりも遥かに強くなっていた。

清貴は観念するようにゆっくりと目を閉じた。

その瞬間。

「きよたか！ 胸！ 胸を触るのよ！」

竜巻の外から木の葉が振り絞るように叫んだ。

目を開く。すると、すぐ目の前に風の精霊の大振りな胸があった。そうか、触ってしまえば、こいつも守護霊になるんだ。

風の精霊は木の葉の声を聞き、きよとんとした顔を浮かべている。そして清貴の視線を追うように、自分の胸元を見る。

二人はおもむろに顔を上げ、ぽかんと見詰め合う。

清貴は掴んでいた腕を素早く離し、脇腹の下から揉み上げんばかりに両手を繰り出した。

「ぎゃあああああ！」

風の精霊は竜巻にも勝る大音声を上げて清貴を突き飛ばした。吹き荒れる風は千々に乱れて消え去る。

間一髪で清貴の魔の手を逃れた風の精霊は、胸を抱きかかえるようにしてへたれ込んでいた。

「危なっ！ あっぶなあゝ！」

頬が蒸気し、先ほどまでの涼しい笑顔はもうなかった。

「あなた頭沸いてるんじゃないの!？」

「ちっ、あと少しでパフパフ出来たのにっ！」

「パフパフ!？」

風の精霊はぶるっと震えて清貴を見上げる。清貴は形勢逆転とばかり

りに彼女の前に仁王立ちした。

「ワンモワチャーンス！」

鉤爪のように構えられた清貴の両手は、二つの乳房を触らんとばかりに広げられていた。

先ほどまでとは打って変わり、風の精霊の目が恐怖に慄いている。この千載一遇の機会を逃す訳にはいけない。

風の精霊が片手を振り上げる。

やられる、清貴がそう思った瞬間、右の頬に強烈な破裂音が響く。

バツチーン！

疾風を叩きだしてくるかと思ったが、違っていた。ただ頬がひりひりと痛むだけだった。

ピンタだった。

「えっち！ 変態！ バカばかああ！」

風の精霊は両手で顔を伏せ、駄々っ子のように泣き始めた。

「あ、えっと？ そのごめん」

思わず謝ってしまった。

「ごめんじゃ済まさないんだからあ！」

風の霊は、ぎゃんぎゃんと泣き叫びつつ、清貴がいかにも非道な行いをしようとしたか罵りつつ、まさに風のごとく走り去って行ってしまった。

「私あんたの守護するのが間違っているような気がしてきた」

木の葉が冷めた目で清貴を見ていた。

「お前のアドバイスだろうが！」

「他意を感じるわ」

むしろ他意しかなかったのも知れない。

「でも、守ってくれてありがとう」

黄緑色の髪を弄りながら、木の葉は礼を述べた。

「ちよつと格好良かった、かな」

「木の葉……」

歩み寄ろうとした途端、木の葉はびくつと震える。

「もう触らせないんだからあゝ！」

小ぶりの胸を抱きかかえて守るように、まさに舞う木の葉のごとく走り去っていく。

自分から逃げ去っていく二人の女の子の背を見ながら、煩惱の代償ってでっかいんだな、と一人反省する清貴なのだった。

「今なら分かる気がするの。風の子が神官を失った後、どうしてあんなふうにな

その日の夜、もう触らないという誓いを立てることどころにか木の葉との関係を修復した清貴は、改めて風の精霊についての話を聞いた。

それはとても切実な内容だった。

ハイランドとヴァルジアの争いは、一夜では語り尽くせないほどの歴史がある。いつから両国が争うようになったのか、その始まりすらはつきりとはしていない。もしかすると互いが邂逅したその時から始まっていたのかもしれない。

古くからこの世界では精霊と呼ばれるものが存在し、複雑な自然の調和を取りなす者として崇められていた。精霊に守護される者はより強大な力を手にし、守護を得ない者をたやすく蹂躪することができた。両国はこぞって精霊を奉り、自国の繁栄と敵国の撃破を祈願したという。国の財政が逼迫するほどに神殿が建設され、言わば神頼み合戦となっていた。だが、神殿を建設して拜めば加護を得られるというわけではなく、真に精霊との関係を築くには契約が必要だった。国中から霊力の高い者を半ば強制的に連れ出し、精霊と契約できるだけの力を付与すべく特別な教育機関まで設立される。

だが、結果を言えばその大半が無駄に終わったと言える。荘厳な神殿を作るために国力は大幅に削られ、労力の担い手となった庶民は重なる重税と長い労役に精魂共に尽き果てて行った。両国は戦う力さえ失い、共倒れ寸前というところまで来ていた。

そんな時、両国にほぼ同時に卓越した霊力を持つ者が現れた。一人はハイランドの貴族の家から教育機関へと進んだ女性。風の精霊と

対等な契約を結び、そのすべての力を付与された。もう一人はヴァルジアにおける奴隷の身分にある少女。雨の精霊と契約を結び、最高神官にまで任命されるということが起こった。

ハイランドは風を、ヴァルジアは雨の守護を得て、国力は漲るよう
に隆盛していった。いよいよ二つの国は全面戦争に突入した。

最初はハイランドの風の軍団が連勝を飾り続けた。ヴァルジアの前線部隊はことごとく敗退し、その国土の三分の一をハイランドに譲ってしまう。だが、連勝に酔ったハイランドは中盤戦以降次々と敗走を続ける。眠りから覚めたかのように雨の軍団ヴァルジアは進出し続け、ついにハイランドの都にまで到達した。

都の防衛線は地獄の極みだったという。後の無いハイランド軍は都の中心に建てられた風の神殿だけでもヴァルジアに渡すまいと徹底抗戦を続けた。都にいた全てのハイランド人が軍事徴用され、死ぬまで戦うことを強要されたのだという。死に行く者たちは、誰もが風の精霊の栄光を叫んで生き途絶えたのだという。

必死の抵抗もやがて露と消えていく。主力部隊は後退を決意し、都は放棄された。風の神殿の周囲には、ヴァルジアの雨の軍団が包囲し、わずかに残った手勢と共に風の精霊とその神官が残るのみとなっていた。そして、神殿への一斉攻撃が始まる。

当時発明されたばかりだった大砲が超至近弾として降り注いだ。柱廊の狭間から疾風が巻き起こる。砲弾は次々と軌道をずらされ検討外れな方向へ飛んでいく。だが、連日続く執拗な攻撃に風の精霊の力も限界を迎えることとなる。神殿は砲弾で随所が打ち砕かれ原型を失っていく。屋根が崩れる瞬間、そこに残ったヴァルジアの騎士たちはやはり風の精霊の栄光を叫び瓦礫の下へと消えた。

崩れ去った風の神殿から這い上がったのは、神官を抱きかかえた風の精霊だけだった。彼女は、もう息をしなくなった神官にいつまでも呼びかけ続け、悲愴に泣き叫んでいたという。それを見たヴァルジアの神官は、全ての攻撃を止め、休戦を申し入れることを進言したという。

話はこれでは済まなかった。

好戦的な雨の精霊は、完全勝利を訴え、進撃を続けるよう神官へ詰め寄った。だが、頑として受け付けなかった彼女に激怒し、ついには独自で群を率いて進軍をはかった。

誰にも予想できなかったのはその後のヴァルジアの神官がとった行動である。

彼女は、自害したのだった。

その報を聞いた雨の精霊は、彼女の元へと駆け付けたがもはや息の音はなかった。その後、ハイランドの都が沈むほどの豪雨が降り注ぎ、ヴァルジアの精鋭部隊は消滅してしまった。

それ以降、誰も風と雨の精霊を見た者はいないのだという。

そして、その舞台となった場所は、廃都と呼ばれ誰も近寄らない場所となった。

人々の間では廃都に足を踏み入れる者は風の精霊に連れて行かれ二度と戻ってくることはできないのだと噂されている。国神とまで崇められた風の精霊は、もはやその栄光の全てを失い、邪神として扱われているのだった。なんとも皮肉な話だ。

「つまり、一時は国家の中樞となったほどの精霊なの。恐れ多いにも程があるくらいよ」

木の葉は、ひとしきり説明し終わると、忠告するように言った。

「あんなふうになつてしまった精霊っていうのは性質が悪いのよ。力がバカみたいに強いくせに、どこか切れたみたいなのところがある、触れればただじゃ済まないのよ」

「そんな奴の胸触ろうとしてたんだな、僕は」

「そう！ 本当にやばい子なんだから。気を付けてよね」

「いや、でも、あと少しであの胸に届きそうだったんだ。上手いってあればあの子も仲間にできたかもしれないのにな」

「……」

風の霊の胸を思い出す。何カッブあるのか分からないが、今まで出会った誰よりも立派なものだった。

あれにもう少しで触れていた。そう思うと、自然と顔が赤くなっていた。

「……」

「やっぱ、このままじゃ不安だし、こっちから仕掛けに行つた方がいいのかな。いつどこから襲われるか分からないよりその方が」

「きよたか」

「ん？」

木の葉は俯きがちに呼びかけると、なぜだか胸を隠すように両手で抱えている。

「そんなに触りたかったの？」

「ん？ 何を？」

「お、お胸」

清貴は慌てて弁明した。

「違う！ お前はどっと思ってるか知らないけど、ぼ、僕は決してそんな意図は」

「いいよ。触っても」

言われている意味が理解できなかった。

「だから……触ってもいいよ。私の胸……触っても……揉んでも」

べ、別に、吸われても……、木の葉はごもごもと口ごもりながら言った。

「こ、木の葉？」

「今日、守ってもらったし」

「いや、あれは別にそんなことのためにしたわけじゃない」

「嫌なの？」

「嫌だと？」

「だから！ 私の胸じゃ嫌なのかな……。風の子みたいなおつきいお胸じゃなきや嫌なのかな？」

木の葉は泣きそうな顔を寄せて言った。彼女の口から吐かれる息は、やけに湿っていて、苦しそうだった。

「本当にいいのか？」

「しつこいよ、きよたか」

恐る恐るゆっくりと木の葉の胸に片手を伸ばす。木の葉は、今度は逃げたりしなかった。

前のように一瞬ではなく、じつくりと木の葉の柔肌を手のひらで弄ぶ。

もう片方の手も胸に添えて両側から揉みあげる。

木の葉は目を瞑り何度も、気持ちいい、と囁いた。

「ねえ、きよたか。私ね、きよたかが風の子を触れなくて、よかったって思ってるの。なんで分かる？」

とろんとした目で木の葉は微笑む。

「そうしたら私だけのきよたかじゃなくなっちゃうもん。風の子みたいな精霊がついちゃうと、きつと、きよたかは私の相手なんかしてくれなくなっちゃう」

「そんなことない」

「あるよ。絶対。私みたいな下級精霊、どこにだっているもん。きつと私がいなくなっちゃっても、きよたかなら私くらいの精霊すぐ

に見つけちゃうよ」

木の葉は清貴に抱きつくと、甘えるように言った。

「最近、森や農園の植物が元気いっぱい成長しているでしょ、なんで分かる？」

小さな唇が清貴の首筋を撫で上げる。

「きよたかに恋してるからだよ」

「木の葉……」

「だって私のご主人様だもん！」

すぐ鼻の先ではにかむ彼女が堪らなく愛おしかった。

「今なら分かる気がするの。風の子が神官を失った後、どうしてもあんなふうになったのか」

清貴は朝が来るまで木の葉を離さなかった。

彼女の寝息を感じながら心を決めた。

これ以上、木の葉を危険な目には合わせろる訳にはいかない。

これは自分の問題だ。

朝日が薄らと滲みだす頃、清貴は一人静かに廃都へと向かった。眠る木の葉をベッドに残して。

「少し寄り道をしよう」

ハイランド騎士団長のヤーナは東へ向けて隊を率いていた。目的は前線の視察だった。前線は今、異様な勢力図を築いている。国境線をなぞる様に配置された防衛線は、ヴァルジア軍の急襲により一か所を決るように突き破られている。そして先へ歩を進ませまいと、ハイランド軍はその周囲に集結し強固な壁を作っている。堡壘を奪取したヴァルジアの重装女兵たちはいわば孤立無援。一個中隊百名強だけが無謀に前進しているという態だ。何倍もの戦力に取り囲まれ、昼夜に及ぶ攻撃を受けている。にも関わらず、彼女たちはその場を占守し続けている。圧倒的劣勢を前に微塵も怯むことなく、臆することなくそこに居座り続けている。むしろ押されているのはハイランドの方とも見える。

伝令からの報告はとても信用できない内容だった。

小柄なヴァルジアの女が重装に身を包み、一人で十人を相手に獅子奮迅の激戦を展開しているのだという。

それだけならまだよい。報告には聞き捨てならない一文が盛り込まれていた。

女兵の中には曲射大砲を肩に担ぎ、担いだままぶっ放す者がいるのだという。

小型砲でも信じられないような話だが、彼女たちが手にするのは弩級の城門突貫砲と呼ばれるものだ。それは籠城戦で強固な防壁を撃ち砕く目的で開発されたものだ。そんな代物を人が手にして撃てるはずはない。ましてや女が担ぐなど常軌を逸している。

前線で一体何が起きているのかこの目で確かめる必要がある。

「狂っているな」

同行する騎士たちに聞こえないようため息をついた。

「少しお疲れではありませんか？」

副団長のゲーリットが囁く。

「いちいち目ざといな」

ヤーナの機微を手に取るように察するこの男は頼りになる。だが、常に傍に置いておくにはいささか面倒な男でもあった。

「ひよつこたちはどうだ？」

話を切り替えるように言う。混成騎士団のことはほとんどゲーリットに任せてあった。

「まだまだ使い物にはなりませんまい。個々の能力は高いが組織力がありません。総力戦で力を発揮できなければ戦場では役に立たないでしょうな」

「構わん。騎士の真似事でもな」

志願者たちをつっぱねるようにヤーナは言った。

「そうとも言い切れませんよ。役に立たないというのは現状での話はつきり言つて、見込みはそこいらの騎士よりも高いかもしれません。身分や経歴など言ってしまうえば戦場では役に立ちません。とどのつまり、戦場で勝つ者が持ちうるものとは、どのような手を使つても勝つた者、ですから」

半ば諭すように言つたゲーリットを煙たそうに睨む。

「戯言だ」

脳裏にあの青年の姿が思い浮かぶ。腹部にそつと触れてみる。痛みは随分前に癒えたが、あの時のことを思い出すと疼くような感覚が広がる。あれ以来、町のどこにも彼の姿を見ていない。きっと町の者ではないのだろう。

もう会うこともない。そつと心の中で呟く。

「ヤーナ様、じき廃都です」

顔を上げ、目を細めて前方を見据える。丘陵を登りきると次第と視界が空へと開け、茫漠とした草原が広がる。風にそよぐ草の中に忽然と佇む悲愴な光景、風の都。

今となつては風の吹き晒しにされ、朽ち果てた廃墟群でしかない。この景色を見るのは心地良いものではない。しかし、前線へ最短距離で足を延ばすならここを通るのが最も早い。

ヤーナは風の都の攻防戦の話を母から聞いた。

グルム戦役の英雄。幼い頃から母だけが目標だった。

彼女が生涯悔やみ続けたのがこの都で繰り広げられた攻防戦だった。都から遙か離れたグルム谷で都への退路を断たれた母は、都の惨状を聞きながら進軍を余儀なくされた。その頃のハイランド軍は至る所で分断され、全体としての力を失っていた。軍団を進めることで都への増援を僅かでも減らすこと、それだけが彼女に出来る都防衛戦だった。ひたすらにハイランドの勝利を信じて戦い、グルム戦役において大勝を上げた彼女を待っていたのは、風の都の壊滅の報だった。ハイランドだけではない。都を占拠していたヴァルジア軍も含めて空が割れたような豪雨に洗い流された。結果は、双方の主力部隊を失うことによる休戦だった。結局はどちらも栄光を得ることなく、多くを失っただけだった。

そして国力を取り戻したハイランドとヴァルジアは再び戦いを始めた。我々の間には血の歴史しかない。自分たちも、またその次の世代も、この歴史を踏襲していくのだろう。

いつか母は小さなヤーナを連れてこの廃都を訪れたことがあった。母は言った。

私には風の都を守れなかった、と。

あれほど悲痛に歪んだ母の顔を見たのは最初で最後だった。

母亡き今、ヤーナは密かな夢を抱いていた。

この風の都を再興したい。

今は瓦礫とかした廃都をつぶさに見つめれば、ここがいかにか荘厳な

都であつたか想像するのは容易い。それに比べれば新都は真新しいだけのつまらないものにしか思えなかった。

忘れられし風の霊の加護を再び得ることが出来れば、きっと。

しかし、今では有力な神官は一人もいなくなつてしまつた。それはヴァルジアも同じこと。あの攻防戦に消えた二人の神官の再来などは信じ難い。そんな空想にとらわれてしまふのは、きっとあの日の母の顔のせいだろう。

ぐいと口元を引き締め自分を正す。

まずは自分の成すべきことをすべきだ。

自身にそう言い聞かせ、今一度廃都を仰ぐ。

ふと、ヤーナの目が細まる。

廃都へと向かう人影が彼方に見えた。

ここに足を踏み入れる者などいないはずなのに。

思いながらも、その影が気になつて仕方なくなる。

「ゲーリット」

「はい、なんでしょう」

機敏な返事が返ってくる。

「少し寄り道をしよう」

ヤーナは影を追い、丘を下つて行つた。

「アストライアの天秤がかけられたのよ」

穏やかな風が吹き抜ける。

繁栄が風化し、人の息吹が絶えてしまったのは遙か太古であるかのような錯覚を感じさせる。

人がそこにいた跡というものは消え、確かにそこにあった史実を神話へと変えてしまう。

人が残せるものとは、そういった茫漠とした感傷に過ぎないのかもしれない。

風の都には、今では吹き抜ける風しか存在していない。かつて往来であつたであろう石畳は枯れ、かさついた足音を響かせる。

ただっ広い草原の中でこの巨大な建造物群は水に浸かつたのだ。

にわかには信じられないような出来事だが、風の都の今の姿を見れば、それほど起こらない限りこれほどの都市が瓦礫の集積と化すようなことはないだろう。

そして今でもこの都は風に守られている。

清貴は風の霊が口にした言葉を思い出していた。

元の世界へ戻る唯一の方法。

彼女は確かにそれを知っている。かつて存在したという自分と同じ境遇の者を彼女は知っているのだ。

もう一度彼女に会って話をする必要がある。残してきた木の葉のことが気がりではあつたが、どうせ止められるに決まっている。それであれば、自分一人でも真実を突き止める必要がある。自分はこの世界にいるべき人間ではない。それだけははっきりと分かっている。

もし元の世界に、あの東京へと戻ることが出来たなら、と考えてみる。

家族はどうしているだろうか。やはり心配していることだろう。一か月以上もの間失踪しているのだ。大学だってどうなっていることが分からない。案外、死んだことになっていたりして。そんな笑えない想像を試してみる。

小一時間ほど歩いたところで足を止めた。

石段と思しき巨大な正方形の台座の上に、肌色をした石が折り重なるようにせり上がっている。

風の神殿だ。

最後の防衛線が築かれていた場所。二つの強大な力を持つ精霊とその神官が戦い、双方の主が息絶えた神殿。今は見る影もない。

その瓦礫の山の上で青色の髪が棚引いていた。

やはり風はここから吹いている。

清貴を見下ろすその表情は、逆光で窺うことが出来ない。

彼女はこの廃都をどのような目で見つめるのだろう。

胸の内に湧き上がる感傷を持って余しながら清貴は口を開いた。

「やあ。この前はどうも」

片手をあげて挨拶する。

風の精霊はしばらく押し黙っていたが、やがて声を発した。

「やあ」

ふわりと片手を上げて応じる姿が陰絵のように映る。

「今日は森の子を連れていないのね」

「まあね。これは僕の問題だから」

ポケットに手をつ突っ込んで気のない風に答える。
ジーンズの中で、指先が震えていた。

「いい街、だっただろうね」

周囲を振り返りながら清貴は言った。

彼女は上げた手をだらりと下げる。

全身から何とも言い難い倦怠感を纏い、清貴を見下ろす。

「ええそうよ。この世で最も美しい都だった」

「だろうね」

しばし沈黙が続く。先に言葉を発したのは清貴だった。

「教えてくれないかな？」

「……」

「僕が元の世界に戻る方法」

「……」

「過去にいたんだよね。僕みたいな奴が」

「昔の話よ」

風の精霊は面倒臭そうに言い放つ。

「聞かせてくれないか？ その昔の話ってやつを」

「聞いてどうするの？」

「戻るのさ。元の世界に」

「あの子を残して？」

「あの子？」

ため息のような声で言う。

「森の子」

木の葉の笑顔を思い出す。怒った顔も、拗ねた顔も。

「あいつは関係ない」

「ふんっ」

あしらうように鼻を鳴らすと、風の精霊は一步步瓦礫を降りてくる。

「見上げたご主人様だこと。守護の契約を結んでおきながら無責任

極まりないのね」

徐々に彼女の影が大きくなる。足場は悪いはずなのに、清貴を見据えたままだった。

「絶対に教えないわ。あなたみたいな人には。絶対に」
知っているかしら、彼女は首を傾げて問いかける。

「守護霊は主人と一心同体。すべてを主人に捧げ、自身のすべてを投げ出してでも仕える者。契約を結んだその時から、私たちはその覚悟を決めている。なのに主人に取り残されれば、私たちはどうなると思う？」

清貴は答えなかった。

だって、それって。

お前のことじゃないか。

神殿の瓦礫から降りてきた風の精霊は試すように言う。

「さて、どうするつもりかしら？」

距離はざっと十歩強。懐に入り込むには些か遠い。

「どうしても教えてくれないんだね」

「ええ、知りたいのであれば私を使役することね」

「僕の守護霊にさせれば、吐いてくれるのか？」

「もちろん。全身全霊をもってあなたに仕えてあげるわ」

そう言って微笑み、片手を宙にかざす。

その手は振り下ろされることなく、清貴の次の一手を窺っている。

分が悪すぎる。

その手から風が発せられる前に彼女に触れるのは、どう考えても不可能だ。

まったくもって友好的ではない彼女の笑みには、もはや恨めしさしか感じない。

美しさを纏った冷酷さ。

それは真冬に吹く、張りつめた木枯らしのよう。

膠着状態というハイプレッシャー。
清貴はいよいよ身動きが取れなくなった。

その時だった。

「貴様ら何をしている？」

振り向くと金色の長髪をなびかせる騎士が手綱を手に現れた。

風の精霊は目だけをそちらに遣った。振り上げた手はそのままだ。

「お転婆ヤーナ。あなたこそ私の都に何をしに来たの？」

その姿を見るや、ヤーナの顔が緊張に染まる。

「風の……精霊……」

対峙する清貴に気づき驚きの声を上げた。

「貴様はあの日の……、なぜここにいる？」

「質問されているのは、あんたの方だよ」

清貴がそう言うと、ヤーナは呆れたように言葉を返した。

「今、目の前にいるのが誰か分かっているのか？」

清貴は頷く。

「風の精霊。かつての国神。風の都の守護者、だろ？」

「知っていてなぜここへ来た！」

馬の駆ける音と共に複数の騎士団員たちがヤーナの後方から現れる。

風の精霊の姿を見とめると、誰もが一樣に凍りついた。

ヤーナはゆっくりと馬から降りる。それに従って部下たちも同様に続いた。

「失礼した。我々は東の国境へと向かう途中、廃都へと向かう人影を見たもので様子を窺いにきた」

ヤーナ一行は礼儀正しく頭を下げた。

国神だったというのは本当だ。あのヤーナがこのような態度を見せるなど、入団試験の時の彼女からは想像もできない。

「そう。じゃあ、そのまま東へ向かいなさい」

あしらうように言うと、視線を清貴へと戻す。

ヤーナは何かを言おうとして言葉を詰まらせている。

その場を立ち去ることができずにいる一行へ向けて彼女は口を開いた。

「あなたたちは信じられるかしら。この人はね、私に守護霊になれると言っているの」

ヤーナは口元を震わせながら呟いた。

「なにを馬鹿なっ……」

「元の世界に戻る方法を探しているそうよ。彼、この世界の人間じゃないんだって」

「それは、まさか！」

「そのまさかよ」

風の精霊はなんの迷いもなく、清貴めがけて手を振り下ろした。

「アストライアの天秤がかけられたのよ」

「私にしてやれるのはこのくらいだ。はっきり言って貴様に勝機はないぞ」

「大丈夫かつ!？」

清貴が目を開くと、すぐ傍にヤーナの顔があった。

「しっかりしろ!」

肩を掴むと強引に清貴を起こした。

どうやらヤーナに助けられたらしい。

風の精霊がいらだったようにこちらを見ている。

「ヤーナ、あなたも私に逆らうつもり？」

「些か不公平ではないだろうか」

ヤーナが毅然と言い放った。

「不公平？」

風の精霊がいぶかしそうに眉をひそめる。

ヤーナは腰に帯びていた剣を引き抜き地面に刺した。

「こやつのような普通の人間が精霊相手にまともに対峙すれば敗北は必至。そのような不公平な戦いにはあなたは満足されるのか？」

彼女は部下の騎士に顎で指示をだす。

すると騎士の一人が進み出てヤーナがしたのと同じように剣を地へ刺した。

「剣で戦えと、そういうことかしら」

青髪を手で振り払い、睨みつける。

「あなたが風を使うなら、こやつは一生あなたの懐へは辿り着けない」

清貴を振り返り、言葉を続ける。

「だが、剣であれば幾分か勝負になろう」

風の精霊の高笑いが響いた。

「勝負になる？ この私と？」

進み出て剣を引き抜き、切っ先を清貴に向ける。

「おもしろいわ。ほんの少しでもそんな馬鹿な考えを持っているのなら、かかってきなさい。風は使わないであげるわ」

清貴は耳を疑った。

これは絶好のチャンスじゃないか。

助太刀してくれたヤーナを見ると、彼女は険しい表情で清貴の肩をたたいた。

「私にしてやれるのはこのくらいだ。はっきり言って貴様に勝機はないぞ」

清貴は小さく頷き、微笑み返した。

「ありがとうヤーナ。この礼は勝った後に必ず返すよ」

彼女は何かを言おうとしたが、黙って清貴から離れた。

ヤーナの剣を引き抜く。見た目よりもずっと軽量で、羽のように軽かった。

風の精霊と再び対峙する。手の震えをはっきりと感じた。

「さあ、あなたからどうぞ」

顎をしゃくって清貴を促す。

大きく深呼吸をして、ぐつと奥歯を食いしばる。

清貴は全力で走り出した。今限りの力を足に込めて。

風の精霊は剣を突き出したまま動こうともせず、余裕に満ちた目で真っ直ぐ睨んでいる。

「おおおおっ！」

腹から力を振り絞るように剣を振り上げて初撃を打ち込む。

だが、風の精霊はまるでまるで清貴の剣の流れをなぞるかの如く華麗にそれを打ち流す。

バランスを崩して転びそうになるのを堪え、振り返りざまに横一文字に切りつける。

風の精霊はダンスのステップでも踏むようにひりりとかわす。

形勢は清貴の攻勢一方だった。

しかしまるで当たらない。剣を振っても振っても空気を切るばかりでまるで手ごたえを感じない。

「あら、もう疲労困憊って感じかしら」

「ふ、ふざけるなっ、また……これからだ」

今一度渾身の力で振りつけるが、またしても流される。

さらに一撃、と風の精霊に挑むが腕がついてこない。

気づけば、彼女は清貴の目の前にいて、残酷に微笑んでいた。

清貴の額に人差し指を当てると、つんと押す。

たったそれだけなのに、清貴はバランスを崩して仰向けに倒れてしまふ。

「恥に思うことはないわ。人の力なんてそんなものだから」

清貴を跨るようにして立つ。

その目は清貴への侮蔑の色に染まっている。

次いで利き手を踏みつけられ、手のひらから剣の柄が零れ落ちる。

清貴は最後の力を振り絞り、もう片方の手を風の精霊に伸ばす。

彼女の胸に触れさえすれば……。

風の精霊は清貴の手首を驚掴みにするとあらぬ方向へじわじわと捻じ曲げる。

「あああ！」

悲鳴が漏れるが、抑えることができない。

「まだそんなことを企んでいるの？ 醜い人」

清貴を掴む手にさらに力が入る。

もう打つ手がなかった。

「さあ、どうするのかしらね？ フハハハ」

面白くてしょうがないという感じだ。

打つ手はない。

打つ手がないのであれば……。

清貴は唇を噛み、見下げる彼女をにらみつける。
最後の攻勢。

手がないんだったら。

「うおおおお！」

清貴の怒声に風の精霊が一瞬たじろぐ。

全力で身を乗り出し、体を伸ばす。

いよいよ両手がおかしな方へと曲がる。

踏みつけられていた手が鈍い音を上げた。

激痛がこみあげてくるが躊躇うことなく半身を伸ばす。

手が使えないのなら。

清貴は目一杯に口を開く。

「ひ、ひいつ！」

風の精霊が清貴の意図に気づいたらしく、短い悲鳴を上げた。

あの時と同じように、清貴に胸を揉み上げられそうになったあの時と同じように、顔を恐怖に慄かせて

「い、いやああゝ！！！」と叫んだ。

大きく開かれた清貴の口が、たわわな胸にしゃぶりつきそうになった、その瞬間。

風の精霊は持っていた剣を投げ捨てて、天にその手をかざす。

刹那、かつて見たこともない程の風の渦がそこに現れた。

「待て！ 風は使わない約束だぞ！」

外野にいたヤーナが声を上げる。

だが、半狂乱になった風の精霊の耳には届かない。

触れるものすべてを切り刻んでしまいそうな渦が清貴目がけて急降下してくる。

「きよたかあ！！！」

少女の声と共に、黄緑色の美しい髪が揺れた。

「木の葉！」

「絶対にさせないんだからあー！」

悲鳴にも似た木の葉の音が頭上に響く。

「だめだ木の葉！ 来るな！」

背の低い幼い体躯が風の渦の中へ飲み込まれる。

「木の葉ああ！！！」

あたり一面に引き裂かれた葉が舞い上がった。

清貴の目に映ったものは、強靱な風の刃に切り裂かれる木の葉の姿だった。

「あなたの我儘、聞かせてくれる？」

昨日の夜、木の葉は清貴の腕の中でこう言った。

「きよたかに恋してるからだよ」

「なあ、目、覚ませよ」

美しかった黄緑色の髪は乱れ、

「お前は僕の守護霊なんだろう？」

元気に満ちた瞳は人形のように色を失い、

「僕のこと好きなんだろ？」

愛を告げた口は薄らと開き、

「僕もさ、木の葉のことが好きなんだ」

清貴の腕の中にいる木の葉はぐったりとして動かない。

「こんなのありかよおお！！！！」

これは遠い記憶の話だ。

その頃、私は国神と呼ばれていた。

誰もが私に傳き、敬っていた。

私はほぼ、神だった。

最も力を有する者のことをそう呼ぶのなら、私は神だった。

だが実態は違う。私は彼らがするのと同様に一人の者に傳いていた。

彼女は美しい人だった。

階級で言えば貴族。

人間の世界において優位に立つ者。

人間において、神に近い者。

そういった者は、精霊でも人間でも尊大な振る舞いをする者ばかりだ。

かくいう私がそうだった。

風の力は精霊の中でも第一級の力と支配力を持つ。

空を舞う私の上に立つものなど、太陽神くらいのものだ、と当時の私は信じてやまなかった。

そんな私にとつてくだらないのは人間たちの争い事だった。

非力な力を見せ合つて、互いに傷ついていく。

どちらも弱いのだからそれらしく生きていればよいのに。

そう思いながら日々流れる血を、我関せずと面白おかしく見守っていた。

とある人間の男との離別以来、私はそんな風にしか人間を見れなくなっていた。

ある日、私はハイランドの夜風となつていつものように空を舞っていた。

眼下の森に無数の灯が見えた。

ヴァルジアとの間に永続的に続く小競り合いの犠牲となつた者が逃れてきたのだ。

ハイランドのいたるところで目にする光景にすぎない。

その森の中には豪華な屋敷があつた。

貴族の家だろう。暖かい灯が籠れ、安寧とした雰囲気を感じられた。力を持つ者、持たざる者。

どこにだってある一風景。

だが、なぜだろうか。

私はその日、遙か高高度を吹くのをやめて地上へ降りてみようと思っただ。

くだらない人間が住まう場所へ。

屋敷の中に忍び降りた私が最初に耳にしたのは、少女の鳴き声だった。

立派なドレスを着た幼い女の子。

顔を真っ赤にして鳴き声を上げていた。

その前に立っているのは父親らしき男。これもまた立派な正装に身を包んだ紳士だった。

何やら抗弁を続ける少女の頬を、その男は何度も打った。

やがて呆れられたのか、その場に少女を残して男は屋敷の中へと入っていった。

中では華やかなパーティーが繰り広げられていた。

私は面白おかしくて、少女へ近づいた。

「どうしたの？」

私は優しい声音で問うた。

少女は泣きはらした目を私に向けて答えた。

「お父様に叱られたの」

「どうしてお父様はあなたを叱ったの？」

「私が我儘を言ったから……」

彼女は俯き呟いた。

「あなたの我儘、聞かせてくれる？」

少女は森の中で野営する民を屋敷に招き入れるよう進言したのだという。

彼女の父は最初それを冗談かなにかだと笑って聞き流していた。しかし、何度も繰り返すうちに機嫌を損ねてしまった。強情な性格をした少女は今宵のパーティーの席、皆の前でそのことをさらに願ったのだという。

彼が怒るのも理解できる。

貴族というものは不必要に誇り高いのだ。

それもあまり道徳的ではない意味で。

少女の言動は、彼にとって皆の前で顔に泥を塗るような行為だったのだろう。

外に連れ出され叱責されるに至った。

変わった貴族の娘だ。

外の者など放っておけばよいものを。

結果、自分が放りだされたのでは意味がない。

「私たちだけ贅沢をして、外の人たちは家も食べ物もないのよ」
少女は言う。

「だってそんなの、不公平じゃない」

私はしゃがんで彼女の顔を覗き込んだ。

幼く小さな瞳は、力を秘めたようなギラギラとしたものを感じた。
私の中で何かが疼いた気がした。

「おねえちゃん是谁？」

「私？ そうね、夜風よ」

「夜風？」

目をまんまると開いて首を傾げる。

「精霊……さん？」

私は頷いて見せた。

彼女はさすがの様に私に言ったのだ。

「あの人たちを助けてあげて！」
馬鹿な子供だ。

大きくなれば父親の言うことも分かるようになるのだろうが、幼い時分には理解できないのだろう。

この世界で強く、したたかに生きていく術というものを。
力こそがすべてなのだ。

私はおかしくて、この子に意地悪をしてやろうと考えた。

「それは無理よ」

「どうしてっ？」

「あなたに力がないからよ」

きょんとした顔を浮かべている。

「何をするにしても、力が必要な。私を使役するには私に見合うだけの力が必要なの。今のあなたにそれがある？」

俄然、しょんぼりと肩を落としてうな垂れる。

「あなたにその力が、ある？」

殊更意地悪に私は問うた。

少女はゆっくりと顔を上げた。

その目の力強さに思わず面食らったものだ。

「今はない。でもいつか必ず」

私が空へ戻ろうとしたとき、彼女は言ったのだ。

「私が大きくなって力を得たときは、私と共に弱い人たちを救って」
生意気な子供だと思った。

私を誰だと思っているのだろう。

私を使役することが本当にできると信じているなんて。

私は少女に頷き返して空へ戻った。

彼女はいつまでも私の後ろ姿を見つめていた。

これが私がとある少女と出会った日の話だ。
やがて、ハイランド最高神官として人々から崇められ、私を傳かせることになる女性。
なんとも面白おかしい夜の出来事だった。

「私の力になりなさい。私はあなたの力になる。そして私たちは一つになる」

少女と出会ってから幾年かが過ぎた。

その時の私は彼女のことなどとうに忘れ去っていて、緊迫するハイランドとヴァルジアの情勢を静観していた。

そんな折である。

いつものように空を舞っていた私は、痺れるような感覚を覚えた。それは私にとって戦慄にも近いものだった。

誰かが、風を使役した。

私の意思を介すことなく、どこかで、誰かが風を操った。

言うなれば、無意識の内に自分の体を操作されたような感覚だった。私は急いでその元凶を探した。

風を総べる私の意思を無視して風を操る者がいるなんて信じられないようなことだ。

私は、感じた悪寒を頼りにハイランド中を飛び回り、やがてハイランドの都へとやってきた。

確実に近づいているのが分かる。

とてつもない霊力が都から感じられたからだ。

辿りついたのは、都の端に建設された学舎だった。

昨今、ハイランドとヴァルジアは守護霊を得ようと躍起になっている。

各地で神殿が建立され、揃いもそろって神頼みをしている。

それに応じる下級霊もいるようだが、私には何の興味も持てないことだった。

その学舎もそういった政治的情勢の中で作られたものだった。

一流の神官を育成するために設立された機関。
各地から霊力があると思われる者が集められ、日々その鍛錬に打ち込んでいたのだという。

私は学舎から少し距離を置いて注意深く様子を窺った。
確かにこの中にいる。風を使役した者が。

その時、一つの窓辺から風に靡くカーテンが目に入った。
カーテンは内から外へ向かって、その純白の身を靡かせていた。
風が内から吹いている。

その窓辺には一人の女性が佇んでいた。
彼女は真っ直ぐこちらを見上げていた。
いつか見たことがある目だった。

私は警戒心を秘めながら、その窓辺の前へ舞い降りていった。
彼女はじつとこちらを見つめていた。
口元を含んだ微笑みが気に食わない。

「お久しぶり。風の精霊さん」
その時思い出した。あの日の、父親に屋敷から締め出された女の子だ。

「やっと逢えたわ。ずっとずっとこの日を待っていた」
彼女のいる室内から柔らかな風が吹き出し、私の全身をくすぐった。
気に食わない。

右手を一振りして風を凧ぐ。
純白のカーテンが動きを止める。

「ふふ、乱暴ね」

彼女はそう言い微笑むと再び風が吹き始める。

「身の程をわきまえなさい！ 人間のくせに私を使役しようなどと生意気な真似を！」

そう叫んだ私を彼女は変わらない表情で見つめている。

もう手加減はしない。

疾風のかまいたちを起こし、目の前にいる彼女目がけて叩き付ける。学舎の半分は消し飛んでしまうであろう疾風は、しかし、私の手を離れた途端に崩れて消え去る。

声にならない悲鳴を上げた。

風は私自身だ。私のすべてが風であり、風のすべてが私だ。

風が私の言うことを聞かない！

「約束覚えている？」

「約束？」

彼女は両手を広げた。

まるで私を包みこもうとするかのように。

「私に力をかけて。そして弱い人たちを助けるの」

「世迷言を！」

私たちの間で爆風が起きる。

またしても彼女は私の風を砕いた。

後方へと離れた私を彼女が追ってくる。

風を纏いながら、飛んでくる。

どれだけ強く力を発動しても彼女を包む風が凪ぐことがなかった。

「どうして！ どうして私の言うことを聞かないの！？」

私に追いついた彼女は私を強引に抱きしめた。

戦慄く私をあやすように言ったのだ。

「私の力になりなさい。私はあなたの力になる。そして私たちは一

つになる」

その日、私は彼女に胸を触ることを許してしまった。

私が人の守護霊になったのは、それが二度目のこと。

もう二度と人の傍には寄るまいと決意していた私が許した失態。

結局、私は後悔することになる。

彼女という女性と出会い、彼女の傍で時を過ごし、彼女の心に触れ、彼女を好きになり、そして。

彼女を失うこととなる。

「とんだ収穫祭だな」

ヤーナは心配そうに後ろを振り返った。

彼女が手綱を引く馬の上には、木の葉を抱きしめ俯く清貴がいた。

清貴は口を固く閉じ、陰った顔にはいく筋もの涙が流れていた。

ヤーナはため息をつき、歩を進めた。

未だに自分が目にしたものを信じることができなかった。

風の精霊は狂う様に泣き出し、巻き起こした竜巻の中に忽然と姿を消した。

かつてハイランドの国神と崇められた精霊のあられもない涙。

聞かずとも分かる。

彼女は思い出してしまったのだろう。

あの風の都の攻防戦での出来事を。

守護霊の加護を受けたことのないヤーナには彼らがどれほどの絆で繋がっているのか知らない。

それでもあの風の精霊の取り乱しようを見れば大体は理解できた。

ヤーナは清貴に何と声をかけてよいのか分からずにいた。

どんな言葉も彼の胸には届かないだろう。

そして何より気にかかるのは、風の精霊が言い放った言葉だ。

アストライアの天秤がかけられた。

確かに彼女はそう言った。

清貴が別の世界から来たということ。

それが意味するのはただ一つだ。

かつての言い伝えが神話でなく史実であるなら、直面している問題

はヴァルジアとの戦争など非にもならないものだ。

天地が、その言葉通り、ひっくり返るかもしれない。

とにかく調べなければならぬことが山積している。

ヤーナは頭の中をゆっくりと整理しつつ、次に自分が何をすべきか考えを巡らせた。

ずっしりと思い空気に包まれたまま、小隊はリーフ家の前にたどり着いた。

馬から降りても、清貴は木の葉を離すことなく抱きかかえていた。

ヤーナは清貴の肩を叩いて言った。

「何かあれば、新都にある時計台の守り人の元へ来い。彼を通じて私と連絡が取れるようになっていいる」

だがしかし、清貴は頷き返すことすら出来ずに佇んでいた。

ヤーナは憐憫の念を振り払おうとするように、馬に乗った。

来た道を戻りだしたヤーナの後ろから、家から人が出てくる音が聞こえた。

ちらりと見やると若い夫婦と小さな女の子が驚いた様子で清貴に駆けつけていた。

いつぞやの入団試験の日、清貴に言ってしまった言葉を思い出す。

つまらない、私は彼の家族とその仕事のことをそう言ったのだ。

ヤーナは、清貴に打たれた腹部に手を当てた。

やはり疼いている。直接的な痛みではない、別の痛み。

いつか直接、彼と向き合い、非礼を詫びたい。

ヤーナは手綱を引き、元来た道を駆けて行った。

朝霧に包まれた森の中は異様なまでに静まり返っていた。

木々のざわめきも今は聞こえない。

露に濡れた森は生き途絶えたようにその息吹を失っていた。

森が黙祷を捧げている。

簡素な墓標の前で、清貴の心は空虚さに打ちひしがれていた。

花束を添える小さな手をぼんやりとした目で追いながら清貴は言った。

「ありがとう、マリナ」

彼女は首を横に振って応える。

「ううん、いいの」

そう言つて微笑むが、その瞳は清貴を案じ、どこかよそよそしい。綺麗な小花だった。名前は知らない。薄紫色の花弁を黄緑色の萼が包むように支えている。

黄緑は木の葉の色だ。

風に揺れる彼女の髪も同じ色だった。

マリナが清貴の半身に抱きつくように寄り添う。

小さく震える彼女の頭をそつと撫でる。

木の葉のお墓を共に建ててくれたリーフ夫妻は遠巻きに二人を見守っていた。

そこにいた誰もが、どのような言葉を口にすればよいか分からず途方にくれていた。

リーフさんは隣にいた妻の肩を叩き、二人をそつとするため家路についた。

歩きながら深いため息がついてでる。

「キヨタカ君、大丈夫かしら」

「分かん。彼は強い子だと信じるしかない」

「今日は収穫祭だというのに……」

早朝にも関わらず、人の通りが多い。

皆が収穫祭の準備に奔走している。

一年でもっともこの地が活気づくこの日、リーフ家はまるで取り残されてしまったように沈んだ空気を孕んでいた。

この日は言わば、植物を司る木の葉を祝福する日でもあるというのに。

静まり返った森は、木の葉と共に息を引き取ってしまったかのようなだった。

そして、リーフ家の悩みはそれだけではなかった。

清貴が木の葉を抱えて家に戻ってくる少し前、夫妻は衝撃的な話を耳にしていた。

ヴァルジアがハイランドに対して開戦を宣言したのだ。

噂が真実なら前線は大変なことになっているらしい。

謎の女兵団によって挟まれた防衛線へなだれ込むようにヴァルジアの大軍が侵入し、ハイランド軍は初戦で敗走を帰したそうだ。

現在新都は応戦に燃え、異様な空気に包まれているという。

「ついに戦争が始まるのね」

「いつかはこうなる。分かっていたことだ」

リーフさんは半ば諦めたように言った。

「私たちも逃げた方がいいのかしら」

夫婦の知人の中には噂を聞くと早々に避難の支度を始めた者もいる。そういった人たちは皆、共通して過去の戦火で家族や土地を失った経験を持つ者たちだ。

経験者たちは知っている。

自分たちのようにもつとも弱い立場の者が戦火に巻き込まれればどのようなになってしまうか。

それを知るからこそ、彼らには迷いがないのだった。

「まだどうなるか誰にも分からないんだ。簡単に農園を捨てるわけにはいかん」

リーフさんはそう断言した。

丹精込めて育んだ農園を手放す気はさらさらなかった。

そんなことがあっても守りぬきたい。

だが、そう思うと同時に思い浮かべてしまうのは愛娘マリナのこと

だった。

何にも代えがたい夫婦の宝物。

それを危険に晒す訳にはいかなかった。

生命の息吹を感謝するこの日、見上げた空はどこまでも晴れ渡っていた。

この空の向こうでは今頃、両国の若者たちが命を奪い合っているのだろう。

リーフさんは額に手を当てて、独り言のように呟いた。

「とんだ収穫祭だな」

夕暮れの中始まった収穫祭には様々な顔が浮かんでいた。

一年の実りを祝う顔、迫る戦火を案じる顔、それぞれの思いが入り混じる喧噪の片隅に清貴は佇んでいた。

酒を口にしても、広がるのは旨味ではなく、解することのできない苦味だけだった。

集う農園主たちの中にリーフ一家の姿はなかった。

戦争が始まったらしい。

先ほど通りすがりの人が話していた内容によれば、ハイランド中の騎士が厳戒体制に入り、予備兵に召集の令が下ったという。

言うまでもなく混成騎士団も各隊への分散配置が粛々と進んでいる。都から離れたこんな田舎だからこそ宴が執り行われた訳で、新都ではまったく状況が違うであろう。

だがしかし、清貴にとってそれはまるで他人事のようにしか思えなかった。

木の葉を失った衝撃は、あらゆる現実を遮断し、全身から気力という気力を奪ってしまっていた。

今の清貴にあるのはただ、木の葉を巻き込み、その命を奪ってしまった後悔だけだった。

寄りかかる木立を見上げれば、まるで輝きを失った葉が力なく垂れている。

脳裏をよぎるのは木の葉の笑顔だけだった。

一人とりのこされた自分はどのように生きていけばよいのか。半身をもぎ取られたようだった。

ここに木の葉はいない。

その現実をまざまざと感じると身悶えするほどの寒気がする。

戻ろう、木の葉のいるところへ。

引きずる様な足取りでふらりと森の中へ足を踏み入れる。

月明かりで薄ぼんやりと浮かぶ森の夜道には、夜行性の動物がそこかしこでカサカサと音を立てるのみだった。

真っ直ぐ道を進み、今朝リーフ一家と共に建てた木の葉の墓まで辿り着く。

マリナが添えてくれた花が月に照らされて輝いていた。

ゆつくりとそこまで歩き、地に両手をつく。

この土の下に木の葉はいる。

このままでは本当に木の葉は消えてしまう。

その思いは恐怖へと変わる。

彼女を失たくない。

ずっと傍にいてほしかった。

いつまでも傍で笑ったり、小突きあったりしながら、一緒にいたかった。

「木の葉っ……」

指先で土を抉るように掻き出していく。

このまま木の葉を土に還してはいけない。

脅迫観念に似た衝動に駆られて、土を掘り返す。

「帰ってきてくれ」

懇願する言葉はやがて激しさを増し、正気を消し飛ばしていく。

「木の葉っ！ 木の葉っ！」

うわごとのように繰り返し彼女の名を呼び続けた。

手の平が切れて血が流れても痛みは欠片も感じなかった。

沈み消えゆく恋人を手繰り寄せようと掘り進めていく。

泥にまみれた清貴の腕を掴む手があった。

清貴はぐしゃぐしゃになった顔で見上げた。

涙で霞んだ視界に映ったのは夜風になびく青い長髪だった。

憂いを含んだ面持で彼女は清貴を見つめていた。

一瞬で全身がこわばった清貴をなだめるように優しくその手を握った。

「もうやめて、お願い」

風の精霊の瞳は震えていた。

清貴にはなぜ彼女がここへ姿を見せ、そして、悲しんでいるのか理解できなかった。

そして何よりはつきりと感じたのは憎しみだった。

木の葉を奪った女、清貴の無二の守護霊を殺した女。

憎しみは凄まじい速さで濃縮し、清貴の中で次々と形を変えていく。視界は狭まり、暗闇の中に風の精霊の姿だけが浮き上がる。

握る彼女の手をゆっくりと解くと、まっすぐその首へと伸びていった。

風の精霊は微動だにしなかった。

まるで清貴のその行動を受け入れるがごとく真っ直ぐに見つめ続けるだけだった。

細く白い首をつかむと同時に彼女を押し倒す。

清貴の重みが徐々に加えられていき、十指がきつく締め上げていく。それでも彼女は清貴を見つめ続け、やがて掠れた声を絞り出した。

「ごめ……ん……なさい」

薄く開かれた瞳から涙がこぼれた。

清貴の手は思わず彼女の首を緩めた。

すると風の精霊は苦しそうに深く息を吸い、吐きながら涙をこぼし、繰り返した。

「ごめんなさい」

彼女の頬をつたう涙に清貴からこぼれた涙がいくつも重なった。

「なぜだ」

強張った肺から痺れた声を絞り出す。

彼女は何度も何度も同じ言葉をくりかえした。

「ごめんなさい」と。

清貴には分からなかった。

なぜ彼女がこれほどに悲しい顔を浮かべているのか。

それはまるで鏡に映る今の自分を覗いているようだった。

「私は……私はっ」

風の精霊は両手で顔を覆い、むせぶほどに声を上げて泣き出した。

清貴には、もう彼女を締め上げる力は湧いてこなかった。

どれほどの時が流れただろう。

二人は木の葉の墓の前でうな垂れるようにうずくまり向き合っていた。

風の精霊からは昨日まで見せていた気位の高さは消え去っていて、そこに残るのは弱々しい少女の面影だけだった。

そして彼女は語りだしたのだった。

風の都の最後の日の出来事。

黒く心の闇に閉ざされた彼女の昔話について。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1099x/>

風の都 雨の都

2011年11月20日19時23分発行